

4の陣地を逐次破壊し、かつ、日本軍の戦力を消耗させることにより、初めて攻撃の成果がえられたのである。この「消耗戦術」とも言うべき方策が成功するためには事前準備の周到、戦闘間における適切な統制、調整および協同が必要であつた。

(2) 各作戦段階における概況

(a) 4-12までの第1陣地帯に対する攻撃

不準備早急な攻撃開始のため、全般的統制がとれず、攻撃部隊においても調整不十分のため、各隊ごとの各個の戦斗となり、多大の損害を蒙つて目的を達成することはできなかつた。

しかし、日本軍第1線部隊の戦力を減退させ若干の地歩を獲得することはできた。

(b) XXIV〇の第1次攻撃(4-19以降)

周到に準備された統、総合戦力を間断なく発揮することにより、陣地を弱化し、日本軍戦力を消耗させたのち、歩戦チームにより止めを刺すことによりスカイライン高地、我如古付近および伊祖付近を奪取することができた。

しかし、嘉敷、西原、棚原陣地等は日本軍の自主的撤退により占領することができたのであつて、反斜面による陣地が火力による破壊を免れていたこと、TⅤの使用に制限を受けていたこと、日本軍が兵力の消耗を逐次補充したこと等により、米軍は大いに苦しめられたのであつた。

しかし、本攻撃の結果、日本軍62Dの兵力の大半を消耗させ、32Aをして、新鋭兵団の投入による部

署の大変更を実施させたのであつた。

(c) 10Aの第2次総攻撃(5-11以降)

洞窟陣地を火力により破壊するには、大口径砲によるか、直接射撃によることが必要であつた。

従つて両翼を包囲しようとした本攻撃構想は、大口径砲および艦砲支援の容易な方面よりの戦斗進捗を期待したことも1要因である。

本攻撃においても、日本軍を消耗させつつ、弱点に対する渗透攻撃を行つたが、反斜面を利用した統、総合火力の發揮困難な陣地ほど、これに対する攻撃速度は緩慢であつた。

攻撃準備期間は短時日であつたが攻撃進展が極めて緩慢であつたので、攻撃実施と次期攻撃準備とが併行して実施された。

統合戦力發揮のため、攻撃第1日は、10Aにおいて全般統制を行つたが、じ後は各兵団に大巾に分権せざるをえなくなつたのは、戦斗の激烈、地形の錯雑によるものであろう。

(d) 攻撃速度

| 方面   | 東海岸方面<br>(7D-96D<br>-7Dの中心軸)                                       | 中央方面<br>(96D-77D<br>-96Dの中心軸) |
|--|--|-------------------------------|
| ① 嘉手納上陸より前<br>進陣地帯の攻撃(4-01~08)             | 1日平均<br>約2.4k<br>(中央方面に<br>比し、大き<br>く旋回した)                         | 約1.6k                         |
| ② 全平均<br>(4-09~5-30)                       | 約170m<br>(中央方面に<br>比し大であ<br>るのは、5<br>-21以後<br>の包囲行動<br>の成功によ<br>る。 | 約120m                         |
| 第1次総攻撃より<br>第2次総攻撃の終<br>了まで<br>(4-19~5-30) | 約220m  | 約140m                         |
| ③ 上陸より作戦終了<br>まで(4-01~6-22)                | 約480m  | 約400m                         |
| 備 考  | 中央方面においては、第2次総攻撃において最も戦いの進捗がおそく5-11~5-30の間、1日平均約100mであった。          |                               |

(3) 統合、総合戦力発揮上影響のあつた個々の要因について

(a) 火力支援、調整機関の発達

陸上第1線部隊に対する火力支援調整は、目標情報の配布、目標の配当、多種類の火力支援部隊に対する任務の付与等極めて複雑であつたが、その調整機関は下は歩兵大隊から、上は51TFのHQにまで設けられ、有効な支援を与えられた。

この機関は作戦の進展に伴い各種の改善が行われ(たとえば、通信部隊の改編等)莫大な火力量を処理できるようになり、現今におけるFBCO機構の基礎が確立された成果は大である。

また、海兵航空機と陸軍航空機、海兵隊砲兵と陸軍砲兵を相互交換して支援を行つたり、艦砲射撃部隊が常時専任されたことは、本作戦の特色であつた。

(b) 艦砲による火力支援とその効果

火力支援の艦艇は、順番に巡航するのではなく定位に滞留したので、砲術将校や地上の観測者が地形および日本軍陣地の特性を認識するにつれてその価値を発揮した。そしてよくFBCOに統合されて活動した。

しかし、戦艦の主砲と艦も日本軍の洞窟陣地を貫徹することはできなかつた。複雑巧妙に地下深く掘られた地下陣地の撃破は、単に支援火力だけでは不可能であつて、首里築城陣地は、艦砲、FAのほか、AAやLVT(A)の火力を以て補足しても破壊することはできなかつた。

(c) 砲兵支援とその効果

首里陣地に対する第2次総攻撃では62Dの砲兵合計26コBnが直接支援に当り、第1線部隊は交代しても砲兵は定位に残つたままであつた。

さらに、10A砲兵、各0A、および77Dの臨時配属FAの合計14コBnが増援した。そのほか、ⅢMはLV T(A)の2コBnをFAとして新編成し、訓練し、かつ使用したが、これは75Hの8コBnに相当する火力であつた。

これらの大砲兵は、FBCOにより、見事に一元運用せられ、偉大を威力を発揮した。

しかし、10A長は、沖縄の日本軍の防禦力、ならびに将来の本土地上作戦を考慮して次のような軍団砲兵を要求した。

- 1コ観測 Bn と 4コ FAHQ Co
- 1コ 105 (SP) Bn
- 3コ 155 HBn, 1コ 155 H (SP) Bn
- 2コ 155 k Bn, 1コ 155 k (SP) Bn
- 2コ 8" HBn, 1コ 8" H (SP) Bn
- 1コ 240 H Bn

その意図とするところは、自走砲による近距離直射と大口徑砲により洞窟陣地を破壊しようとするものである。海兵隊では、侵徹、破壊力の大きい8" H、240 H等をとくに要望した。

(d) 諸戦種の協同

10Aの最終報告書によれば

「艦砲、航空、砲兵および戦車によつて歩兵に与えられた莫大な支援なくしては、南部沖縄における堅固な陣地の攻撃で歩兵の前進はできなかつたであらう。

支援火力が歩兵をして、反復攻撃の大きな仕事を完遂することを可能ならしめた」と。

本報告書の意見のうち特に歩戦の協同の適否が陣地の奪取に支配的影響を与えていることが看取される。すなわち、地形上TKが参戦できなかつた場合、あるいは、歩戦チームの協同が適切でなかつた場合は、大低攻撃が失敗しているのである。

(e) 雨期による影響

5月下旬より始つた雨期は、車両の移動を殆んど停止させたため、機械的に依存しかつ補給の状況に影響されやすい第1線部隊は機動力を著しく減退した。航空活動は困難となり、艦砲射撃の観測も制限され、火力支援も十分でなかつた。

従つて、この期間における攻撃速度は、極めて減退し、日本軍は少い兵力を以て抵抗しつつ、自主的撤退に成功したのであつた。

c 弱点の看破と利用

(i) 要旨

米軍は日本軍の弱点に乗じて意表に出で、あるいは渗透攻撃を実施し、積極的にこれを利用することに努めた。狭少な地域に周到に準備された日本軍陣地は一挙突破とか、一挙に包囲撃破する方策は実施困難であつたばかりでなく、日本軍各隊は飽くまで陣地を固守するので、残存拠点のある限り、米軍は側背に大きな脅威を感じたのである。従つて、日本軍拠点は1つ1つ撃破する必要があつた。

これがため米軍は、火力により間断なく日本軍戦力の消耗、および陣地組織の破壊を行いつつ、強きを選び、弱きを求めて進撃攻撃を行つた。

これにより日本軍の強固な拠点も孤立分断され、各拠点ごと、圧倒的優勢な米軍戦力のもとにさらされたのである。

すなわち米軍は、所謂「相手を揺さぶりつつ」戦機を作為し、適時攻撃戦力を集中するに努めた。ただし、日本軍の健斗によりその実施は軽快に行うことができなかった。

## (2) 戦例

(a) 嘉敷高地は正面より攻撃するも成功の見込みがなかつたので27D右翼隊の牧港西部進出に成功するや機を失せず嘉敷西方に兵力を転用して4-20背後より攻撃を実施した。

(b) 5-13、3831R長は、コニカル高地攻撃に当り、主攻を北方から行うより変更し成功した。これは地形は堅固であるが配備上は堅固でない正面を選定したのである。

(c) 5-21、3811Rは、シュガー高地に対し、日本軍の配備上の弱点、地形の死角、側防砲兵制圧の好機を利用してこれを占領し、首里陣地崩壊の端緒を作つた。

(d) 5-29の1MDの首里城趾占領は、日本軍後退作戦間における掩護部隊の間隙に乗じた適切な挺進攻撃

であつた。ただし、以後補給困難のため、何等積極的行動を行わなかつたため戦術的価値は少なかつた。

## (a) 戦法上の弱点捕捉

日本軍洞窟戦法上の弱点に乗ずるため、火焰、爆薬戦法を行つた。また、日本軍の白兵突撃の機を捉え、あるいは洞窟からおびき出して大火力を集中した。

## (f) 時機的弱点一夜間攻撃

日本軍が「米軍は夜襲を行わない」という先入主を以て油断しているのに乗じ、配備の間隙を衝いて夜襲を行い、あるいは、夜間を利用して潜入する等の行動を時々実施した。

### 例

- 4-18夜の牧港通過および同夜の城間東方台地に対する夜襲。
- 5-16夜における3071Rの1000が実施した石嶺高地の奇襲
- 6-12夜の1/171Rの実施した八重瀬岳陣地の攻撃

## (g) 新兵器の使用

日本軍の遊撃に対しては、VT信管を、洞窟陣地に対しては、火焰TRKにより制圧し、追撃砲陣地は新薬定機を使用した。

## (3) 本攻撃法の成果

米軍の弱点攻撃の思想は、所謂要点攻撃の思想と矛盾するものでなく、攻撃目標たる緊要地形奪取のため、その手段として弱点に対する攻撃を実施した。

そして、結果は逐次に陣地要点を奪取して行つたのである。

その成果の獲得が逐次であり、緩徐であつたのは、日本軍の奮斗によるところが大であろう。

#### d 包囲迂回機動の活用

##### (1) 要旨

本作戦は全般的には陣地戦の様相を呈し、正面攻撃となつて機動の余地が少かつた。それ故に多くに機動力の発揮については大いに強調され、幾多の局部的迂回が実施せられた。

それらが多くの場合成功しているのは、機動力を発揮しようとする部隊は士気旺盛で、精銳であることが一つの原因である。また、堅固な陣地に対しても依然包囲迂回の機会があり、またその効果は大であることを示している。

##### (2) 戦例

(a) 27Dは牧港迂回の成果を利用して、4-20より嘉敷陣地を背後より攻撃。

(b) 相互支援不十分なレツド高地、ピナクル高地に対しては、迂回により側背攻撃。

(c) 前田陣地に対し、4-28、5-01、ブロッハウス方面よりの側背攻撃の努力。

(d) アイテムボケット陣地に対する4-26、27の包囲攻撃

(e) 4-14からの本部半島陣地の攻撃

(f) 4-19からの伊江島の戦斗。

(g) 6-04以降の小塚半島の攻撃

#### e 対洞窟陣地戦法

##### (1) 要旨

首里陣地の攻防戦においては、反対斜面を利用して巧妙周密に編成された洞窟陣地が米軍を最も悩まし、その処理の進展が作戦全般の進歩の基礎となつた。

米軍は沖縄作戦以前より、従来の戦訓に基き、編制、装備・訓練上各種の対策を講じていたが、日本軍も次々に新しい対応策を以て臨んだので、戦斗の当初は順調に実施できなかつた。

しかし、中期以降においては、従来の経緯の活用と日本軍戦力の減退、既設地下陣地の減少等により、逐次成果を挙げていたのである。

##### (2) 処理戦法

第1次総攻撃の経験により、つぎのような結論をえた。  
「大火力により日本軍およびその陣地を消耗破壊しつつ、その火力掩護下に歩戦チームを洞窟に近く進める。ついでTK、自走砲により制圧しつつ各洞窟に対し、歩兵の爆薬攻撃、火焰TKによる攻撃、あるいは、ガスにより

洞窟から日本兵を煙り出したのち、射撃手榴弾を加えて撃破する。

(3) 各作戦段階における進歩

(a) 第1陣地帯の攻撃

4-08頃からの攻撃、4-19総攻撃等の経験を  
得て上記のような戦法上の結論に達した。

とくに、4-19より参加した火焰TKの運用は大  
いに熟練させ、歩兵と一体となつて戦うべきことが  
強調せられた。

(b) 第2陣地帯より首里付近陣地の攻撃

本戦闘間は上記戦法が大いに向上され、戦闘の経過  
は迅速でなかつたが逐次陣地を崩壊させるのに成功し  
た。

- 前田断崖の戦闘は洞窟陣地をめぐる激烈な戦闘  
が継続されたが、結局、陣地を孤立化させて、火  
焰、TK射撃、爆薬により破壊することができた。
- アイテムホケツドの戦闘が停滞したのは戦車の  
進出が阻まれ、火力と歩兵のみにより逐次地歩を  
固めなければならなかつたためである。
- フラトトップ、テツク高地の攻撃において5-  
18が戦闘の転換となつたのは、それまで使用で  
きなかつたTKが進出し、火焰を含む歩戦チーム  
が反対斜面の陣地を攻撃できるようになつたから  
である。
- シュガーローフの攻撃では、5-18まず、T  
Kを挺進させて日本軍を誘出したのち、ロケツト  
砲を積んだトラックを挺進して弾着射撃を浴せか

けた。

(c) 作戦末期の戦闘

天候の回復、彼我戦力差において米軍は著しく有利  
となり、TK、火焰TKは機動的に利用され、砲撃、  
航空攻撃にも観測は良好となつた。歩戦チームの協同  
も、永い経験の賜として極めて緊密に実施された。

火焰TKは200フィートのホースを取り付け、T  
Kの近接困難な地形においても活躍した。

2 対夜襲戦法

(1) 意義と影響

日本軍は多くの場合、反対斜面に陣地を占領していた  
關係上、米軍は高地頂上を奪取することは比較的容易で  
あつたが、これが確保は至難であつた。

すなわち、米軍が頂上を占領するや、日本軍は砲迫お  
よびMGの火力を集中して占領部隊を孤立化し、制圧し、  
そして機を失せず逆襲した。とくに夜間の逆襲は熾烈で  
あつた。

沖繩の戦闘では、米軍が昼間占領して日本軍が夜間に  
これを奪回することを絶えず繰返したのであつた。

(勿論、昼間の逆襲もしばしば実施された。)

そして、米軍が日本軍の逆襲を撃退し、一戦その位置  
を確保するときは、多くの場合その地域の戦闘は好転す  
るのが常であつた。その理由は、逆襲に失敗した日本軍  
は戦力が急激に減退し、次の逆襲は前よりも衰えるのが  
通常であつたからである。

(2) 具体的対夜襲戦法

- (a) 薄暮時までに速やかに再編成し、円陣防禦を編成する。
- (b) 火力による制圧  
日本軍陣地の相互支援性を断ち切るため隣接拠点を制圧して孤立化させ、さらに、逆襲支援火器、および逆襲部隊に対して大量の火力を集中した。  
砲、迫、艦砲の支援は、前進観測者の派遣等により概ね適時適切に実施された。  
友軍の至近距離まで火力が指向され、近接戦闘にも協力した。屋根の狭いスカイラインの戦闘では、第1線歩兵が友軍の砲弾を撃つことさえあつたのである。
- (c) 夜間絶えず照明を行い昼間化した。各1Rに対し、照明用艦艇1隻、特別照明のため軍団に若干の艦艇を以て夜間照明を行つた。これは極めて有効であり、日本軍の逆襲または進襲攻撃の初動を制し、あるいは前進間を捉えて的確な集中射撃を実施した。
- (d) 近接戦闘、格闘の実施を強調した。  
日本軍の突撃戦法の採用を推奨したので、近接戦闘になつても米軍は相当勇敢に戦闘した。兵の中には、自ら「万才突撃」と称して所謂斬込みを実施するものさえあつた。
- (e) その他局部的ではあるが軍犬(補給隊軍用犬小隊)銃敵器等が使用された。

(3) 戦例

- (a) 4-12夜の日本軍夜襲は、信号弾の識別により概ね予知していたので、各所とも日本軍夜襲を撃退した。それは主として近戦火器と手榴弾によるものであつた。宜野湾地区では配備の薄弱部を突破された。
- (b) 5-04の日本軍攻勢は、火力と近接戦闘により撃退した。海岸地区では艦砲が支援射撃を行つた。  
5-05、日本軍伊東Bに配備の間隙を突破され、棚原に進襲を許した。
- (c) スカイラインの対逆襲戦には火焰TRが参加した。
- (d) 伊祖付近の日本軍逆襲は、海軍艦艇からの照射により大量の火力を集中して撃退した。
- (e) シュガーローフの戦闘では、反斜面による日本軍は米軍火力のため頂上を越えて前方まで進出できず、シーソーゲームを繰返していたがついに戦力尽きて米軍に占領された。
5. 編成、装備および訓練の戦闘に及ぼした影響
- (1) 要旨  
永い太平洋戦争の経験を経て、編成、装備訓練は、対日本軍および作戦地域の特性に応ずるよう逐次かつ迅速に改善せられてきた。しかし、上陸作戦を主体としたものであつたがため、要塞戦的な陸上作戦には重火力に不

足する面があつたが、これは艦砲により補足することができた。

しかし兩期備地では、車両の移動に制限を受け、第1線歩兵の機動力を制肘する欠陥を暴露した。洞窟陣地の処理法は、当初訓練未熟であつたが、戦いつつ訓練し、その技倆は大いに向上した。

海兵師団は編制上、近戦火力に富むが重火力に欠け、陸軍師団はこれに比較すればその反対であるが、結果的には戦斗力に大した差が認められなかつた。これは、軍団以上の支援火力が極めて大であつたためであろう。

## (2) 歩兵

陸軍歩兵、海兵隊歩兵はともに「沖縄の至宝」(10 Aレポートによる)であつた。よく日本軍歩兵に対抗できる程に精強であつた。

編成装備上、1 R 自ら TK および 4.2 M を固有装備とすることの必要については後述する。

なお、当時の 1 R の T/O B には 105 H 6 門が装備されているが、実際には装備されていない。1944.6 の T/O B では除かれているので、当時すでにこの思想によつたものであろう。なお、戦後、75 H 6 が 1 R の T/O B に組み入れられた。

訓練においては、よく日本軍の長所を学び、精神要素をも取り入れた。とくに夜間攻撃、兵力の転用、近接戦斗、組戦斗等において著しく進歩した。しかし、火力支援や後方支援に依存し過ぎる傾向があつたため、支援困難な地形天候のもとでの戦斗では戦機を逸することが度々であつた。また、簡単に占領地を放棄する事例が多かつたが、人命尊重の思想と支援を欠いた孤立の戦斗に陥ることを避けたためであろう。

## (3) 戦車

### (a) 装備

海兵師団は TK B n を固有編制に持つていたが陸軍師団にはなかつた。しかし配属部隊として TK B n を所有するのが常であつた。また 1 R に TK 00 を所有することが要望され、1944.6 の 1 R 編制表に 900 の TK 9 両、105 H の TK 9 両が装備されることとなり、1945.4 より実施された。これには TK の集結用法と直協用法の思想問題、生産上の問題等があつたと思われるが戦后になり大巾な改編が実施されることとなつた。

### (b) 価値

沖縄戦における TK の価値は絶大なものがあつた。6 M D 長シエバード将軍は「沖縄の戦斗進歩に最も寄与した支援兵器を選ぶとすれば、それはまず何よりも戦車を選ぶであろう」と述べ、一方牛島将軍も「敵の戦力は戦車にある」と述べ、ともに戦車の威力を高く評価している。

### (c) 損害

10 A は TK 約 540 両を使用した。陸軍の 4 = TK B n と 713 火焰 TK B n 合計 380 両中 221 両 (57%) が破壊された。

これは主として戦斗初期における訓練の不十分、運用の不適切、TK の補給整備上の欠陥によるものであるが、全般的に見て、TK に寄せられた期待の大と、TK 部隊の活躍の結果にもよるものである。



(d) T K部隊としての成果

洞窟陣地の攻撃には欠くことのできぬ部隊であり、歩戦チームの協同戦の適否によりこれら陣地攻撃の進捗状況を異にした。

島尻地区の戦いでは、T Kの集結用法が可能となり日本軍に止めを刺す原動力となつた。

しかしながら、地形上T Kの使用を許さなかつた嘉敷北正面、西原高地等の戦い、あるいは5月下旬の二期の間はT Kが十分活動できず戦況は停頓した。これは、T Kの構造上の問題とT Kの障害排除の技術上の問題があつた。

(4) 火 焰

新編713火焰T K B Dが初めて本戦に参加して絶大な威力を発揮した。火焰T Kは4-19から始つた第1回総攻撃に奇襲兵器として現われ、とくに反斜面洞窟陣地、部落内陣地岩山などにおいて有効であつた。島尻地区の戦いでは射程増大のためホースが使用された。

X X N Oでは将来作戦のため2コ火焰T K B Dを、M M Oでは各M DのT K B Dの編成に1コ火焰T K Oを増加配属の要求を出しているのを見てもその価値と成果が察せられる。

また、航空機により森林、錯雑地に遊撃中の部隊をナバームにより攻撃し成果を挙げた。

これら火焰攻撃は、従来の硫黄島、ペリリューなどによるものに比し、規模が遙かに大であつたのでその成果も絶大なものがあつた。

(5) 4.2時化学迫撃砲

レイテ戦で使用した経験に基き実験兵器である4.2時

迫を以て編成した迫撃中隊が各1 B に配属された。この砲は高角度、命中率、射程、破壊力がすぐれており、また煙弾の使用にも適当であつた。

これは第1親歩兵の戦力を一層と増強するものとして1 B 編制表に定めるよう意見が出されたが、その実現は戦後になつた。

D 参考所見

(1) 米軍では、戦術戦法の創意改善が積極迅速に実施され、経験を経るに伴い目覚しく進歩した。その結果とくに、統合戦力発揮の手段としてのF S O O機構、砲兵の直接支援のための組織、歩兵の近接戦法などにおいては、今日行われている戦術戦法の基礎を確立したと言ひうる。

(2) 全般的にみて、陸上戦は機動の余地の少い状況であつたが、局部的に行われた包囲迂回、弱点に集する奇襲攻撃は大きな成果を挙げた。

すなわち機動を重視する作戦あるいは火力を重視する作戦等の各種状況上の差があつても、常に火力と機動を併用し、かつ両者がよく調整されることの必要性を痛感させられる。

(3) 圧倒的に優勢な空海勢力のある場合においても、陸上戦の価値を減少するものではない。

(4) 本土のような錯雑地においても機甲科部隊の価値が大であることが明らかとなつた。状況によつては、T Kは歩兵直接支援兵器のような用法がなされたこともあるが、

全般として見るとき矢張り、火力と機動力を備えた装甲兵器としての特色を発揮している。

ただし、当時の米軍T Kは、地形気象に適合せぬため行動上の不慮を招いたことがあつた。この点、T Kに限らず部隊の編成装備を作戦地域の特性に応ずるよう改組改善する必要を痛感する。

(6) 米軍の戦術戦法が型に捉われず極めて融通性のあつた点は学ばねばならない。

例えば、弱点を発見すれば機を失せずこれに乗ずるよう主攻を軽易に変更した例である。勿論、このことは、後方部隊および火力支援部隊の機動性が大であること、F S C O等の機構が発達していたことも併せ観察する必要もある。

(6) 攻撃衝力の持続が出来ず、全戦闘経過を通じ攻撃の反復となつた。その原因は支援兵器が適時前方に推進できなかったため近接戦では洞窟による日本軍の衝撃威力が米軍のそれよりも大であつたためである。突撃衝力を増大する工夫が必要であろう。

(7) 小規模の地雷でもその威力は大であつた。

地雷原の活用については大いに留意すべきことであろう。

## 対住民施策

### A 軍政機関の組織と運用

#### (1) 組織

(a) 指揮系統と10A長の権限

上陸作戦段階ではニミツツースプルアンズターナー→バツクナーの系統を通じて実施され、又10A長は陸上占領地の行政を行つた。

5-17、上陸作戦段階の終了が認められ、スプルアンズ→バツクナーの系統により、10A長は沖縄周辺の全占領地の防衛開発に任じた。

6-27、陸海空を統合した琉球軍が編成され、O J N G F O Aの直接指揮のもとにA長は新占領地の防衛開発と距岸25マイル以内の海上防衛に任じた。

以上のように作戦から防衛への移行過程において逐次に権限を10A長に委任した。

(b) 沖縄島司令部について

本司令部は、海軍作戦基地部、海軍航空基地部、陸軍航空基地部、軍政部、建築隊、連合通信隊、陸上防衛隊等から成り、10Aのための兵站業務占領地の行政防衛、建設整備等の広汎な任務を持つもので、実際には軍の補給地区と兵站地帯の一部として行動した。

(c) A内の軍政組織

10Aが沖縄島司令部を持つほか、C、Dは1-3、コノ軍政分遣隊を配属されていた。

(2) 10A長の運用

(a) 作戦初期は、戦術区分に基き隊下指揮官を通じて統制し、O・D長は各々作戦地域内の軍政に任じた。

(b) 作戦の進捗に伴い、10A軍政部が全般統制計画を作成し、O・Dはその管理業務を行つた。

(c) 占領地守備の段階では、全軍政関係委員は、沖縄島司令部の下で業務を実施した。

b 住民の指導、処理の方針

(1) 方針

作戦を妨害させぬよう退避させ保護するとともに、占領軍に対し労力と現地物資を提供させる。

(2) 準備

L+40日までに米軍戦線内に收容を予想される住民30万人に対する食糧補給と応急医療のため必要な物資として各師団は7万人分を携行した。

(3) 処理の実態

(a) 避難民の保護

占領地域内における避難民に対する最大の問題は食糧と給養を与える以外に大した困難はなかつた。

(b) 住民の協力

住民を收容施設に入れ、直ちに教育を開始したが、住民を無抵抗にするよりも協力を得ることの方がさらに困難であつた。

レイテ、ルソンのような占領地では、士民を組織化し、謀略に、また戦線の一部担任等に使用したが、旧日本本土内においては、極めて困難であつた。

(c) 非占領地の住民

軍と住民とを区別することが困難であり、ある時は、沖縄住民は白衣を着て移動するよりにとのピラを撒いたこともあつたが、実際には識別できなかつた。

捕虜の取扱ひにおいても、住民、防衛隊、軍隊の区分が困難であつた。

o 占領地区における治安警備

(1) 治安警備部隊の配置

(a) 中、北部沖縄.....当初並MO担当

許田—古知屋以北 6MD (+1=MR)  
以南 1MD (-1=MR)

(b) 同上.....5-10以降27D担当  
(各1Rを中北部沖縄、本部半島の3地区に配置す)

(c) 慶良間諸島.....2Bn / 3051R

(d) 首里周辺地区(占領後).....77D(-)

(2) 治安警備のための部隊行動

- (a) 作戦終了後は占領地の掃蕩、対遊撃戦実施のため、各地区ごと小部隊で実施したが、遊撃拠点の突撃が判明するに伴い大きな部隊を以て包囲撃滅するに努めた。
- (b) 作戦末期になると完全掃蕩のため、10Aは島尻地区より、与那原一那覇の線に向い、また、27Dは石川地境より北部沖縄に向い、適宜PLを設けつつ一ラ一式に北上した。

(3) 成果と影響

- (a) 占領地区においては、日本軍が軍民一体となり、遊撃戦を実施し、その活動は終戦まで続いた。日本軍は中北部の森林山地を利用し、作戦部隊の補助として、当初から遊撃専門部隊を配置した。南部では残存洞窟を拠点とした作戦部隊の非組織的活動が行われた。
- (b) 治安警備に任じていた米軍の損害は全般から見れば大ではないが、大きな兵力を牽制された結果となつた。すなわち沖縄本島のみでも、作戦部隊1~2コDを配置するのほかに防衛部隊も常駐させ、管理補給部隊もまた対遊撃戦訓練を実施しなければならなかつた。しかし、住民等の非武装抵抗が熾烈でなかつたため、米軍の占領地行政は割合容易となつた。

d 心理戦

(1) 方針

日本軍に対しては抵抗意志の破滅一投降の宣伝を行うこととし、従来の経験により暴動、内部崩壊などは期待しなかつた。

住民に対しては、沖縄人が内地人ほど抗戦意識は旺盛でないものと判断し、軍民離反一内地人で編成した軍隊と住民の支援を分離すること。一および、米軍に対し無抵抗の状態におくことをねらいとした。そして、一部の住民の協力は期待できるとしても全面的協力は無理であろうと考えていた。

(2) 心理戦の手段

- 予め作成した伝單の飛行機による配布。
- 現地で印刷し、砲撃弾により撒布。
- 戦車、艦艇、飛行機からの拡声機使用。
- 戦線背後に投下する遠隔操縦ラジオ。
- 捕虜を使用する投降勧告。
- ハワイ既住者を利用する説得。

(3) 組織

10A心理戦チーム。

(4) 成果

島尻地区の戦斗開始までは、日本軍の士気は旺盛で捕虜は極めて少なかつた。作戦末期においては、日本軍の抵抗と自殺を止め、投降するよう全力を尽して相当の成果を挙げ相当多数の捕虜を得た。しかし作戦に対する影響は少いものであつた。

住民の大部が無抵抗であつたのは、青壮年が軍に編成されてきたこと。食糧不足で米軍に給養を依存せざるをえなかつたためであろう。

心理戦実施の対称を軍と住民とに分け、住民は占領地と日本軍作戦地域内の者とに分けて実施されたが、住民の大部は日本軍作戦地域内にあり、実施は困難であつた。

○ 参考所見

(1) 米軍は沖縄住民の協力をうることはできなかつたが、抵抗を受けることも少なかつた。

それは、住民中の青壮年が日本軍に入つていたこと、及び食糧の欠乏等によるものであろうが、一面米軍の住民対策が比較的周到に準備され組織的に実施されたことによるものであろう。

特に当初から住民に対し多量の食糧その他の物資を準備しあるいは収容所を設けて住民を収容したこと等は作戦の系果除去上極めて有効であつたと思われる。

(2) 米軍の心理戦は相当規模に行われたものの直接作戦に寄与する所は少なかつた。この種の工作は作戦開始後の短期間に即効的な効果を期待することは当時の日本の国情からみて無理であつたと思われる。しかし作戦の末期においては、投降者の増加したこと、住民の協力が逐次得られたこと等をみればこの勢力が全く無駄であつたとは考えられない。作戦終了後の基地建設における住民の役割等を考えれば極めて重要な施策であり、或る程度は効果もあつたものと思われる。

6 人事および兵站支援

a 要旨

(1) 作戦が人事兵站支援に及ぼした影響。

沖縄作戦は予想外に激烈長期になつたため、兵站計画の大変更を来すこととなり、大きな支障を生じた。

とくに、那覇港と与那原港を奪取して船舶搭載物を補給する海運基地とする計画が実現できなかつたため、増大する部隊補給に追われ、これがため、守備および建設整備用補給品の揚陸が遅延して基地建設がおくれ、日本本土進攻計画にも影響を及ぼした。

(2) 人事兵站支援が作戦に及ぼした影響。

4月中旬、早くも補給品とくに弾薬の不足により、一時攻撃を中止したのち、その集積を待つて4-19総攻撃を開始した。

5月下旬からの連日の豪雨は、沖縄の陸上連絡を切断し、機械化された10Aは泥中に機動力を失い、たゆまざる応急処置、水運、空輸の利用、臂力搬送等により辛うじて作戦支援に間に合つた。

戦死傷者数も予想外に多かつたため、病院収容や後送施設もまた逼迫した。しかし非戦闘消耗が遙かに少なかつたので、長期患者用設備をこれに振りむけることにより危機を克服した。

b 各種戦術行動と損耗との関係

(1) 10Aの全作戦間の損耗率

34.2%

(ただし、総人員は6-30現在の人員数である。  
補充人員を加えた作戦参加の全人員数ならば、  
若干低下するであろう。)

(2) 月間の人員損耗率(3ヶ月平均)

|     |       |
|-----|-------|
| 7D  | 21.9% |
| 27D | 15.8% |
| 77D | 18.6% |
| 96D | 25.6% |

幕元では、1D18%であるので、7D・96Dは遙かに大であつた。

(3) 攻者と防者の損耗比

幕元では攻者対防者は、2:1であるが本作戦では、当初より彼我戦力差が大であり、かつ、防者が殆んど玉砕したので比率は1:2の逆の現象を呈している。

5-04の日本軍攻勢当日、1MDの人員損耗は、7D・77Dの受けた損耗より大であつた。1MDは西海岸方面にあつて日本軍の攻撃を受けず、牧港西北の日本軍防禦陣地を攻撃中であつたからである。

(4) XXVとIII Mの5月中旬における人員損耗は、III Mが著しく多い。新たに戦線に加入して、日本軍の特性、地形に関する認識に欠け、また訓練上の欠陥によるものであろうか。

(5) 長期かつ激烈な砲迫の射撃下の戦斗、および近接戦斗のため、戦斗疲労病神経病等の非戦斗損耗が比較的大であつた。しかし、非戦斗損耗の全体的比率は幕元の月間8%とほぼ同じである。

XXV内各Dの月間平均 7.5%

III Mの月間平均 8.9%

戦斗損耗と非戦斗損耗の比率は、幕元によれば、10:8であるので、これから見るなら本作戦の非戦斗損耗は小であつた。

これは患者治療設備の良好、早期取療によるものであろう。

c 補充・部隊交代、賞罰

(1) 補充

(a) 人員補充上問題となつた事項

補充兵は予備隊としてある期間、戦斗訓練や、部隊に融け込むための教育を施すよう企画されていたが、戦斗状況逼迫のため、しばしば教育未完のまま戦斗に参加した。

III Mは上陸当初から各々約2500名の補充兵を待つており、歩兵部隊として訓練したのち海岸作業員として第1線に近く待機させて戦場に慣れさせるようにした。しかし、作戦の後期になると、到着したばかりの未教育補充兵を使用しなければならないことに悩まされた。

(b) 今後の補充組織に及ぼした影響

10Aは将来作戦のために、1Dは補充中隊（既教育兵により編成す）を持つべきであると報告した。

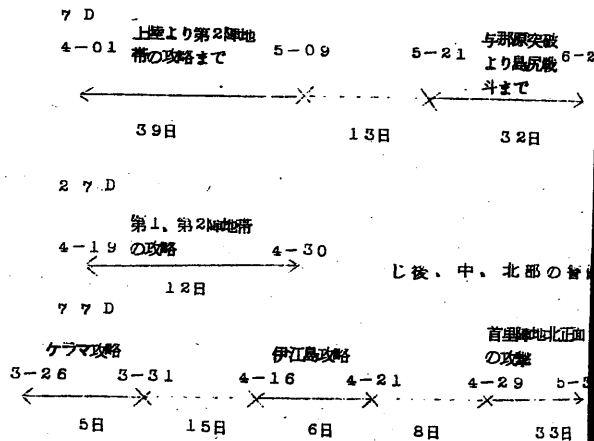
XXMOは、1Bは25%の超過人員を持ち、各1Dは約1000人の歩兵補充大隊を持つべきであると要求した。

補充組織は、戦いが長期激烈になるに伴い問題化したのであつて、欧州戦場では、1944年末頃から、Dが補充中隊を持つようになつた。

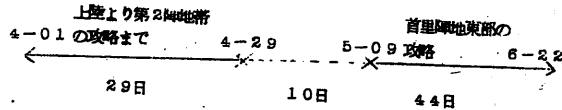
太平洋方面では硫黄島、沖縄の戦斗により痛感され、将来の補充制度検討に大きな影響を与えたのである。

(2) 部隊交代

(a) 戦斗期間と休養期間



96D



註 実線は戦斗期間  
点線は休養期間

本図のみでは戦斗による損耗疲労程度と休養による回復状況との関係、および補充員の充足率等は不明である。しかし、戦力回復のための最少限の期間としても不足であつて、第1線部隊は疲労のための神経病が多発した一原因となつたようである。

また、且MOでは部隊交替を行うため師団数が不足して困つたので、将来は30Dを以て編組されたいと要望している。

(b) D内1Rの部隊交代

各Dにおいても1Rを屢々交代させ、常に新鋭兵力を第1線に差向けるよう努めた。

96Dに一例をとると

○ 4-29のD交代までの間、D内各1Rは一通り部隊交代を実施した。第1次総攻撃は激烈であつたので、3821Rは4日間で3831Rと交代した。

○ 第2次総攻撃より追撃までの20日間は部隊交代を行わなかつた。

○ 島尻地区の戦斗では3831Rとの交代を行つたが、3811Rは5-17以降6-22まで37日間第1線にあつて戦斗した。

(3) 賞罰

規律の維持、士気振作のため相当思い切つた処置を講じている。以下賞罰につき若干の事例を挙げるがその影響については詳らかでない。

(a) 4-09までの嘉数の戦斗における失敗により1b D長/3831Rは、交代を命ぜられた。

(b) 1651R長/27Dはアイテムポケット周辺の戦斗指揮の不適切により、1R長を解職された。

(c) 軍功ある者に対する勲章の授与

(d) ライアン高地(城間西方)、オブライエン高地(和字原)など勇者の名をとつて地名としその功績を讃えた。

d 補給、収容後送、基地建設

以下主要問題点とその応急対策ならびにそれが作戦に及ぼした影響

(1) 港湾占領の必要性

計画では、早期に那覇港をドック施設とともに占領し、かつ、中城湾を艦隊泊地とするため、与那原港を利用する考案があつた。しかしながら、陸上作戦が進展しなかつたため、那覇、与那原港の占領が遅れ、長期間、荷卸しの大部分は渡具知海岸で継続された。そのほかに多くの揚陸点が設けられたが、補助的一時的なものに過ぎなかつた。

これら揚陸海岸には棧橋を設け、道路を新設し、応急設備を施して概ね計画量に近い揚陸量を実現することができたが強風豪雨の影響日本軍空襲による妨害のほか、計画変更に伴う基地建設計画の大幅拡張意外の激戦による10Aの補給所要の増大等がありこれに基く揚陸作業に少なからぬ支障を来し作戦及び基地建設に影響を及ぼした。また、中城湾を艦隊泊地とする作業も遅延し、西良間諸島を7-01まで利用しなればならなかつた。

(2) 水路による補給、後送

5月下旬の雨期が始まると、3本の主補給路のうち、完全に使用できるのは東海岸の第13号道のみとなり、水路による補給後送を併用せざるを得なくなつた。しかし、揚陸点の設定、長期の揚陸には相当の準備を必要とするのであつて、応急措置により一応作戦上の要求に応じたものの相当の混乱は免れなかつた。

陸路補給の困難のため、水路補給に依存せざるをえなくなり、作戦方向を変更して、上陸作戦を行つた例として6MDの小隊半島の戦斗が挙げられる。

(3) 空中補給

空中補給の必要はしばしば生じた。1MDの前線は、5-30~6-09の間、専ら空輸を受けた。

空輸は当初CVEにより実施されたが、のち嘉手納飛行場より行つた。投下の正確を期するため雷撃戦を使用されたことがある。

1MDは空輸の難易を考慮して攻撃方向、時期を定めなければならなかつた。



(4) 弾薬の不足

全作戦間を通じ砲兵弾薬は十分でなかつた。それは戦斗が予期に反して長期激烈で、当初の予定を遙かに上回るものであり、兵站計画の大変更を余儀なくされたがためである。

日本軍の頑強な防禦戦斗に遭い、米軍はまず物量で圧倒するの必要を感じ、[兵站90%、戦斗10%]の思想を持つていた。

4-19のXXIV〇第1次総攻撃開始は弾薬の集積が1つの大きな要因であつた。

島尻の戦斗においては、海上に弾薬補給所を開設し、水路補給を行つたことがある。

なお、日本軍による弾薬の損害(75ミリ以上)は、350、339発(消費弾薬総数の約17%)であつたことは注目を要する。

(5) 兵器および物資の相互交換、彼此融通について

(a) 4.2吋M7の弾薬の不足を海軍ストックを使用し、信管の代換品は空輸により解決した。

(b) 航空用カソリンの不足は主として荷卸の遅延と海岸の貯蔵設備がなかつたためである。これは、艦隊輸送船により補つた。

(c) 戦車の損害は極めて大であつたが補給が間に合わぬため、27Dが困頭、中頭地区の守備についたとき、同師団配属の193TKBn装備の全TKを第一線の補給用に充当した。

(6) 患者のマリアナ後送と補充源の問題

作戦当初の6週間の方針では、治療2W以上を要する患者をマリアナに後送した。

従つて恢復患者を原隊に復帰させることができず、補充源の上において大きな問題を生じた。

のちにこの方針を変更し、重患以外は現地で治療することとなり、補充源の問題は一応解決を見たが、現地収容施設の収容能力に問題を生じた。

すなわち当初の携行ベツト数が少なかつたため、支障を来したのである。

参考所見

(1) 作戦が人事兵站支援を困難にし、また、人事兵站支援が作戦行動を拘制する面も大であつた。これは海洋作戦の1特色として考へべきであらう。

(2) 補充、部隊交代は、部隊の戦力を充實増強するため極めて重要であるが、米軍が激烈な戦斗を継続しつつこれを比較的円滑に実施したことは膨大な物量と戦力の優越によるものであつたとはいえ、着意と努力につき推賞すべき点であると考えられる。なお、本作戦の教訓を基とし、近代的補充組織の検討が行われ、また部隊交代のための諸種の統計資料が整理されたのは大きな収穫であつた。

(3) 本作戦における兵站は、当面の作戦支援と将来戦のための建設作業まで含まれていたため、極めて広汎多岐かつ、膨大複雑であつた。しかもよくこれを完遂しえた

のは兵站重視の思想により全軍がよく協力したことと事  
前準備の周到によるものであろう。

